

令和4年12月18日(日)開催 全体共有した内容(概要)

(1グループ)

- ・子ども自身がしょうがいしゃ理解をする場(同じ場で学ぶことの価値)の提供
→幼稚園・保育園はフルインクルーシブ教育、小学校へ就学すると、分けられる。
- ・フルインクルーシブ実現には、大人の考えが弊害となっている。
- ・教員の理解不足(受け止めらる、褒められる、一言) ※研修の充実
→教員の言葉かけ
- ・今までの一律的な教育に対して、多様な学びやその価値を見いだした教育の実現
→みんな同じ。できなければいけない。特性をもつ子どもにとって壁になっている。

(2グループ)

- ・通常の学級の改善が必要なのではないか。
- ・幼稚園・保育園から、フルインクルーシブ教育への理解を根付かせるとよいのでは。
- ・基本的には通常の学級にみんなが一緒にいることがよい。いろいろな先生が入って、でもクールダウンをする場は必要では。
- ・知ることが大事。知識のある大人が少ない。特性のある子どものみが支援を受けている。
→シンポジウムのような、大人と子どもが一緒になって考える場があってもよいのでは。
- ・手話でフルインクルーシブを紹介
- ・どれだけマイノリティに思いをはせていけるか。
- ・海外ではボランティア制度が発達している。例えば、遠足:家族、兄弟が行ける。みんなが大変さが分かる。行くことがあたりまえ。子どもがリラックスできると大人もリラックスできる。

(3グループ)

- ・一つの同じ教室で一緒に学ぶことが理想
- ・それぞれの子どもに対して、適切な学びの場が必要なのではないか。
- ・「知る」「機会」キーワード。子ども同士、大人、教員。学びながら、日々指導にあたってくれている。
- ・学校の裁量でどこまでできるのか。
- ・学校に行く、行かないではなく、たくさんの選択肢があるのではないか。
- ・市の目指すフルインクルーシブ教育は、何を指しているのか。
- ・少人数でないと、フルインクルーシブ教育は実現できないのでは。どれだけ人・予算を付けられるのか。

(4グループ)

- ・フルインクルーシブ教育を難しく考えすぎている。みんなが共にいるということ。そのために、場の統合、学籍の統合、建物(ハード面)の配慮がある。
- ・市は「学びの場」を整備してきたといっているが、まずは一緒にいること。
- ・インクルーシブな社会がどういうものなのか。排除されない社会づくりが大事。
→学校の中で分離されているのに、社会が1つになるのは難しい。
- ・市教委はインクルーシブ教育を進める上で、特別支援教育の更なる推進を目指すと saying していた

が、インクルーシブ教育の理解が異なっている。

- ・学校は保護者のニーズに応えることを前提にしている。
- ・その子どもに合わせた別メニューが必要。できる教科学習や学校行事は一緒に行う。
- ・スマイリースタッフは、正規の教員であってほしい
- ・人を増やすことを考える前に、効果検証をしてから考えるべき。
- ・学習指導要領は参考にしかない。
 - 平成29年度告示 現在の学習指導要領には、特別支援教育の支援が多く追加されている。
 - また、文部科学省は、3か月間、パブリックコメントを募ったが、あまり多くなかったと聞いたことがある。
 - 学校現場が分からないから、書けない。なぜ教員が声をあげないのか。
- ・国連から特別支援教育をやめることを言われたが、国はやめないと回答。インクルーシブ教育を誤訳していると指摘されている。

(5グループ)

- ・通常の学級でみんなが学ぶこと
 - 市が掲げるフルインクルーシブ教育と国や市教委が言っているインクルーシブ教育の文字の理解が分かりづらい。
 - 保育園・幼稚園で誰もが一緒に学ぶ中で、小学校になると一斉指導になったり、分かれたり、その連続性を担保するのが難しい。
 - 通常の学級でみんなが学ぶことで混乱があってよいのではないか。みんなで混乱を乗り越えていくことが大切
 - 教室のイメージを変える必要があるのではないか。
 - 子ども一人一人の成長を支援していかなければならない。特別支援学級も必要ではないか。
- ・人を付ける。予算を付ける。
 - 担任一人ではできない。人を増やす、教室を増やす。莫大な予算がかかる。
- ・学習の到達目標をどこに置くのか。
 - しょうがいのある子どもにとって、通常の学級で、学ぶメリットはどこにあるのか。
 - まずは、みんなと一緒に学習をしてみる。学習指導要領にとらわれず、一人一人の子どもに状況にあわせて目標を決める。人と予算が必要。
 - 実際に支援学級等で学んでいる保護者・子どもから話を聞く必要がある。